

	NPO 法人 京都観光文化を考える会 <b>都草だより</b>	第43号 発行人：小松香織 編集人：西野嘉一 発行所：京都市上京区 下立売通新町西入 京都府庁日本館2階 電話：075-451-8146
---	------------------------------------	--

## ■ 「掃いて清めて 10 年間」 楽しく充実した美化活動

美化活動は都草の原点の1つです。「一步踏み込んで京都の観光資源に関わりたい」との思いから、平成 19 年 7 月、吉祥院天満宮から始まり今年で 10 年になります。現在も参拝者や観光客の皆さんに気持ちよくお参りや観光をしていただくことを願って年間 15 回程度、美化活動を行っています。今年 7 月の千本ゑんま堂で 141 回を数えます。



千本ゑんま堂  
閻魔様と、お掃除の様子



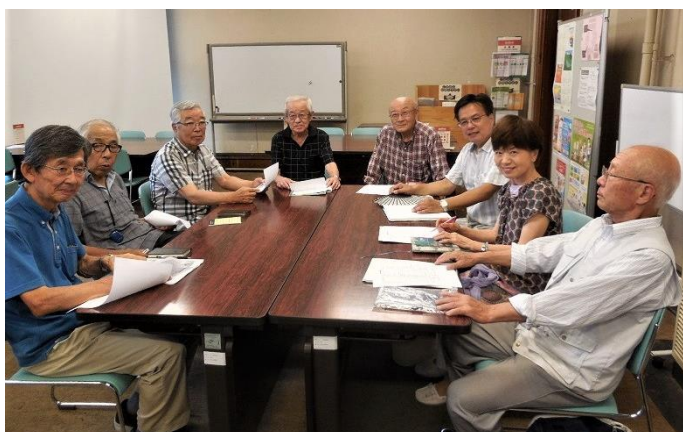
以前はお掃除の奉仕をこちらからお願いしていましたが、真面目で地道な活動が認められ、今日では毎年の実施を希望される社寺が増えています。

僧侶の修行の中で「一に作務（掃除など）、二に勤行（読経や坐禅など）、三に学問」といわれるように、掃除は人格を形成する上で一番大事なこととされています。

我々凡人にとって僧侶の修行には及びませんが、掃除することによってもたらされる物が数多くあります。心地よい達成感を味わうことができますし、気分転換によって日常のストレス解消にもなります。その上、神様や仏様の前でお掃除させてもらうため運氣も大きく上がると思います。最も大きなメリットとしては、掃除を通して参加者同士の交流が深まり「仲間の輪」が広がることです。一緒に汗を流すことによって、たとえ面識がなくてもすぐに大勢の人と繋がりができます。

また、活動のプラスアルファの楽しみとして、掃除の後で社寺の由緒を伺ったり、時には非公開の社殿やお堂を拝見することによって歴史や文化をより深く学ぶことができます。

最後に、美化活動は全くのボランティア活動ですが、「掃いて清めて 10 年間」続けて来られたのも会員の皆様のご理解とご協力のお陰と心より感謝いたします。今後、200 回に向けて益々楽しく充実した活動を続けて行きたいと思っておりますので、初めての方も積極的にご参加いただきますようよろしくお願いいたします。（美化活動部会）



★ 美化活動部会のメンバー



★ 美化活動参加者の皆様（仁和寺にて）

◆◇ 「京都御所」案内いよいよ開始 ◇◆



御苑をご案内してもうすぐ4年になります。平均で年700人、もうすぐ3000人になります。御苑への人々の想いが伝わってきます。我々の熱の入るゆえんです。今年から御所が通年公開になったことにより、この想いをそのまま引き継ぎ、御所のさらなる魅力を発信すべく研修を重ね、新たに御所案内のパンフレットも作成しました。「御苑・御所は都草にお任せください！」が合言葉になるのももうすぐです。さらに頑張りましょう。

ほんの150年前には幕末の血なまぐさい事件が御所の周りで起こっています。蛤御門の変では幼少の頃の祐宮（明治天皇）も鉄砲の音に驚かれたと伝わっています。天皇の政治の場であり、生活の場だったのです。

御所が現在の地に定着するのは1331年光厳天皇の踐祚（即位）の後、

後小松天皇が即位された時に御所と定められたというのが定説となっています。その時の内裏の土御門東洞院邸は一町四方の小さな屋敷でした。その後の権力者（織田信長、豊臣秀吉、徳川家康）の庇護を受け徐々に拡大整備されました。その際、平安時代の内裏と大きく異なるのは、後宮がなくなることでした。その代りお庭が造られます。

江戸時代以降、禁中、禁裏として表現され、「御所」という表現が定着します。何度も火災にみまわれてきた御所は、寛政年間には平安時代の内裏にならい復元されました。さらに安政年間の火災でも焼失しますが同様に復元されて現在に至ります。歴史の中に佇む御所、その建物からかおる残り香と、往時の姿を追い求めて案内をしたいと思います。（専務理事 田村 光弘）



◆◇ 京都御所「三種の神器」はどこに? ◇◆

皇位の標識として歴代の天皇が受け継ぐ三種の神器とは、<sup>やたのかがみ</sup>八咫の鏡そして<sup>あまのむらくものつるぎ</sup>劍璽と称する天叢雲劍・<sup>やさかにのまがたま</sup>八尺瓊勾玉のことです。

清涼殿が天皇のお住まいであった頃、劍璽は清涼殿の<sup>よんのおとど</sup>夜御殿に、神鏡は<sup>うんめいでん</sup>温明殿（後に<sup>うんめいでん</sup>春興殿）の<sup>ないどころ</sup>内侍所（賢所）に奉安されていました。劍璽は天皇の御寝所など常に天皇のお側に置かれていましたが、天正17年（1589）豊臣秀吉の御所造営の折、御常御殿が新たに建てられ、その中に劍璽の間が設けられました。この御殿には公的な儀式に使われた上段中段下段と連なった三部屋があり、天皇が座られる上段の間の背後は帳台構え、その奥が劍璽の間となっています。帳台構えの襖絵は天皇を象徴する桐・竹・鳳凰が色鮮やかに描かれています。劍璽の間は折り上げ小組格天井で、障壁画に囲まれた部屋の小襖を開けると、<sup>おんどこ</sup>劍璽を置く御床があり、ここにはこの場所にしか用いない牡丹唐草文の<sup>うんげんべり</sup>緞縹の畳が置かれていて、この上に劍璽が奉安されていました。

春興殿は明治23年（1890）橿原神宮の本殿として移築されましたので、京都御所で行われた大正天皇即位礼の際に新たに再建され、東京から遷された御鏡が奉安されました。紫宸殿では天皇が座られる<sup>たかみくら</sup>高御座の<sup>ごいし</sup>御椅子の両側に<sup>けんじあん</sup>劍璽案という台が置かれ、同じく東京から遷された劍璽（向かって右に劍、左に勾玉）が置かれました。昭和天皇の即位礼も同様に行われました。（会員 大谷 芙美子）